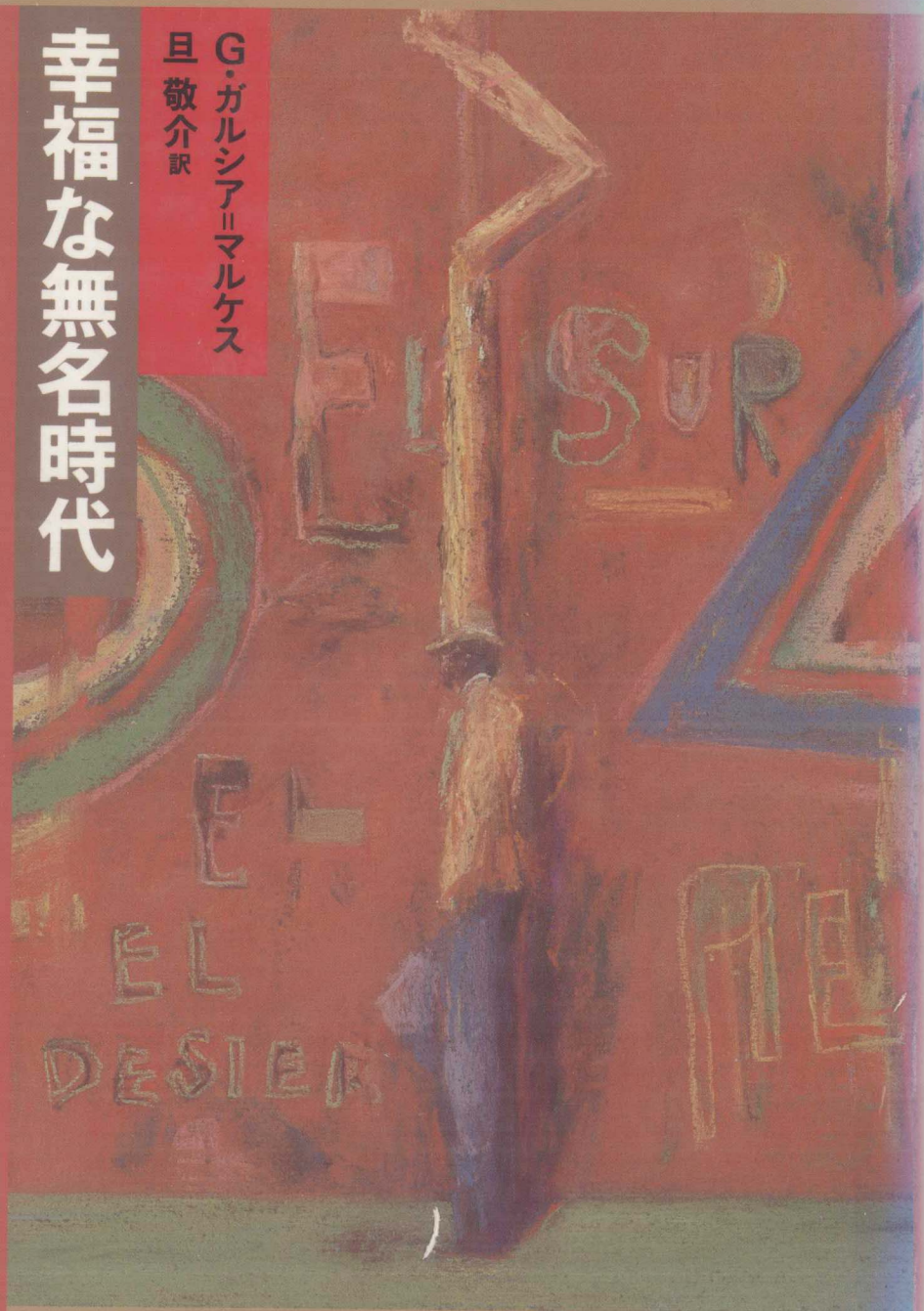


幸福な無名時代

旦敬介訳
G・ガルシア・マルケス



NONFICTION
VINTAGE

G・ガルシア・マルケス
旦 敬介 訳

幸福な無名時

旦敬介（だん けいすけ）

1959年、東京生まれ。東京大学教養学科フランス科卒業。同大学院総合文化研究科修士課程中退。専攻ラテンアメリカ文学。著書に『ラテンアメリカ文学案内』（共著、冬樹社）、『ブラジル宣言』（共著、弘文堂）、訳書にバルガス＝リョサ『世界終末戦争』（新潮社）、マルシオ・ソウザ『アマゾンの皇帝』（弘文堂）、セベロ・サルドゥイ『歪んだ真珠』（筑摩書房）などがある。

幸福な無名時代

1991年1月20日 初版第1刷発行

著 者 ガブリエル・ガルシア＝マルケス

訳 者 旦敬介

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前2-6-4

郵便番号 111

電話 5687-2680（営業）5687-2670（編集）

振替 東京 6-4123

© 1991 ISBN-4-480-83111-8 C 0098

印刷・厚德社 製本・和田製本

幸福な無名時代

目次

*
終
末

市民が通りを埋めた日 5

戦う聖職者 11

命の猶予は十二時間 35

杭につながれて四年 57

潜伏からの帰還 69

*
*

さよなら ベネズエラ 85

七つの死——真相を追って 103

1958年6月6日、干上がったカラカス 117

ベネズエラは犠牲を払うに値する 133

ベネズエラを揺さぶった七十二時間 147

続七十二時間・憶測の彼方で議長は一服 161

貧困のなかの楽園 171

セネガルの譲渡 181

あとがき 196

幸福な無名時代

*

市民が通りを埋めた日

一月二十三日、未明のカラカスは眠りについていなかった。外出禁止令の命ずる通り、家々は扉を閉ざしていたが、部屋の奥にこもった人々は、この三十六時間のうちにベネズエラで何が起こったのか、くわしい情報がほしくて外国の放送局にラジオを合わせようと苦心していた。市内のさまざまな場所で銃声が聞こえた。ちやうどそのころ、無人のウルダネータ通りでは、黒い影に隠れるようにして四台の公用車が東の方角へと下っていくと

ころだった。これこそ実は、誰もがラジオで聞きたいと願っていたニュースだった——独裁者マルコス・ペレス・ヒメネス将軍が国から逃げ出そうとしているのだ。

公安警察の拘置所に押しこまれている無数の政治犯は、未明三時八分、首都上空を飛行機が横切っていくのを耳にした。それは彼らにとって、明確かつ直接的な意味をもった騒音だった——「やつは倒れた」というのがその内容だ。公安警察隊員の一団が夜を過ごしているはずの四階から人のひしめきあう気配が伝わり、それと同時に何台もの自動車がエンジンがかかるのが聞こえてきた。拘留されている者たちはこれによって、先ほどのメッセージの解説が正しかったことを瞬時のうちに知った。すでに町じゅうがそれを知っていた。

確認されたのは数時間後だったが、彼らの推測通り、たしかにそれはペレス・ヒメネス将軍を乗せてドミニカ共和国に向かう飛行機だった。同じ機には、将軍夫人の他に、ルイス・フェリーペ・ヨベーラ・パエス将軍、ペドロ・A・グティエレス・アルファード博士、ペレス・ビーバス博士、フォルトウナート・エレーラ氏、そしてソウレス・バルドー氏が乗っていた。同機は市民運動が激しさを増した一月二十一日の火曜日以來、ラ・カルロータ空軍飛行場でいつでも飛び立てるよう準備万端整えて待機していた。時間を無駄にせず、いつでも離陸できるよう、エンジンは定期的に始動され暖められた。ところが、二十三

日本曜日未明、崩壊した独裁政權の面々が空港に駆けつけた時には、どういふわけか飛行機は準備できていなかった。そのため彼らは、動かぬ機内で苦悶の二十分を過ごすことになった。激しい爆音を聞きつけて、少数ながらも激昂した群衆が空港をとり囲みはじめたころになって、ようやく飛行機は飛びたつことができた。午前六時、同機はシウダ・トルヒーリョに着陸した。

マルコス・ペレス・ヒメネス將軍がミラフローレスの宮殿で過ごした最後の一夜は、身内の静かな集まりで始まった。すぐ近くの「十二月二日」団地地区では、石と空き瓶で戦う市民に対して警察が発砲していたが、独裁者はすでにふたつの戦いに勝ったものと考えていた。ひとつは三十時間前から国民を相手に戦っている戦い、そして、もうひとつとは、その時、首都連邦地区知事であるギリエルモ・ペカニンス退役中佐を相手に戦っていたドミノの試合だった。夜の八時だった。マルコス・ペレス・ヒメネス將軍はドミノの駒から注意を逸らすことなく、事態がすでに鎮圧されているであろう二日後に発表する予定の演説の一番重要な部分について、知事と意見を交わしていた。二十五億ボリーバルにのぼる新たな公共事業計画を華々しい用語で飾って発表するつもりだった。

ドミノにはペレス・ヒメネス將軍が勝った。彼は陽気にペカニンス知事を送り出しながら、明晩、雪辱戦をやりに来るようにと誘った。自宅に戻った知事は今にも眠りに落ちよ

うというまさにその時になって、一本の直通電話で現実引き戻された。ドミノの相手が全ベネズエラ国民を相手にまわした戦いに敗れたという知らせだった。その時すでに將軍はラ・カルロータ空港に向かっていた。もう飛行機には間に合わないと思われた知事は、勝利を告げる最初のラツパが鳴りわたるなか、家族を連れて大急ぎでブラジル大使館に駆けこんだ。大使館は彼に保護をあたえた。

状況がそれまで樂觀に任せて考えていたほど有利なものでないと独裁者が気づいたのは、知事に別れを告げてしばらくしてからだった。ラ・グアイラ市でも国軍部隊が決起したと知らされたのだ。その時点でも彼はまだ最後の手段に打って出られると考えていた——内戦にもちこむのだ。そして、彼自身が表明したところによれば、いざ内戦になればかならず勝てるとの確信があった。しかし、それはもはや意味のない樂觀というものだった。すでに国軍の全体が、若手士官に率いられて国民の側についていたのだから。そのひとり、ウォルフガング・ララサーバル海軍少将は即座に、独裁者にとってかわる軍事評議会の結成に着手した。

二日前から緊張に包まれていた町に、この知らせはすぐに伝わった。それは、怒り狂って髭を剃る暇もなかったベレス・ヒメネスがミラフロレスの宮殿を後にするよりも早かった。しかし、軍事評議会結成の話は午前二時半まで、電話によって伝わった噂でしか

かった。その一方で、秘密裏にストライキを組織した反政府運動の中核である愛国会議の活動家たちはその同じ時刻、その朝最初に放送を開始したラジオ・カラカスに向かっていった。そして、このラジオ・カラカス（他の放送局も次々と放送を開始した）の放送を通じて、この数週間の謎が明かされた——新聞記者のファブリシオ・オヘーダが愛国会議委員長だったことが初めて公にされたのだ。午前五時、外出禁止令が解けた時には、すでにベネズエラが自由な国となつて三時間が経過していた。

『モメント』誌 一九五八年一月二十四日号)

(ブリニオ・アブレヨ・メンドーサと共同執筆)

戦う聖職者